



▶一昨年の秋に行われた料理講習会では、会員の親子で炊飯器を使った天然酵母のパン作りに挑戦した
◀一昨年のクリスマスパーティーの様子。アレルギー対応の手作りケーキを取り分ける(写真提供: 沖縄アレルギーを考えるシーサーの会・神村さん)



File29 「沖縄アレルギーを考えるシーサーの会」

ゆんたく会・料理の講習・子育て情報発信

沖縄からアレルギー情報発信

シーサーの会では、会報「シーサーだより」を随時発行するほか、沖縄から広くアレルギーの情報を発信するため、ホームページを公開している。
内容は、スタッフの紹介や活動状況、会員同士のコミュニケーションの場となる掲示板、おすすめ本や料理の紹介などもあり、「お料理 あらかると」では、小麦粉を使わないパンやケーキなどおやつ作りなどが紹介されている。

沖縄アレルギーを考えるシーサーの会
<http://www.geocities.jp/shisanokai/>
E-mail: shisanokai@yahoo.co.jp



▲「沖縄アレルギーを考えるシーサーの会」ホームページ

インフォメーション

シーサーの会では、6月に「ゆんたく会」を開催する。会員でなくても無料で参加可能。神村さんは、「アレルギーっ子を抱えるお母さんは一人で悩まず、ぜひ参加してほしい」と呼びかける。

日時: 6月29日(金) 午前10時~正午
場所: 宜野湾市人材育成交流センター「めぶぎ」(アメラジアン・スクールの2階)

※用意するおやつは選定のため、アレルギーの種類を連絡してください。
連絡先: 090(1364)5377 (神村)

特に、アレルギー反応を起こす物質「アレルゲン」を自分の判断で取り除くことの難しい乳幼児の場合、周りの大人が気を配る必要がある。アレルギー反

食品を口にする症状が出る食物アレルギーや、花粉やハウスダストなどの吸入から症状が出るもの、金属やうるしなどへの接触、シックハウス症候群のように建築物に含まれる化学物質に反応が出るものなど、人によってアレルギーを起こす原因はいろいろある。

心癒やす集い

同会は平成4年、同じ病院に通院していたアレルギー疾患を

とて「学校給食で見ても、弁当持参でしか対策が取れないとか、飲めない牛乳の費用免除措置がないという地域が多く、アレルギーに対する知識や対応、取り組みといったものは十分とは言いがたい」と、沖縄アレルギーを考えるシーサーの会会長の神村さゆりさんは話す。

「息子が小さいころは、これだけのアレルギーを持つ子は少ない上、県内では専門医も少なかった。周囲の理解が得られず不安でつらい思いをしたことも。シーサーの会と同じ悩みを持つ方々と出会い、アレルギーに負けない体づくりができればいいというふうに考えが変わり、育

児にゆとりも出てきた」と話す。会では2カ月に一度を目安に、ゆんたく会やアレルギー対応の料理講習会などを開催し、会報誌を発行するなど活動している。会員は約40名。ストレス発散の場にもなっている。

取材・撮影/赤嶺初美 (毎月第2木曜日掲載)

国民の3割が何らかのアレルギーを持ち、ますます増え続けていると言われる現代。シーサーの会のような存在が必要とされている。

アレルギーっ子の育児に励み

悩める環境

アレルギーとは、ある種の物質が体内に入ったり触れたりすると、じんましんやショック症状など過剰な反応が現れる状態をいう。卵や乳製品など特定の

応の一つ、アナフィラキシーを起こすと、呼吸困難や気道が詰まるなどして生命にかかわることもあり、アレルギー疾患を持つ子どもたちが増える中、家庭だけでなく、学校、社会においてもその対応については十分に配慮されなければならない。

「息子が小さいころは、これだけのアレルギーを持つ子は少ない上、県内では専門医も少なかった。周囲の理解が得られず不安でつらい思いをしたことも。シーサーの会と同じ悩みを持つ方々と出会い、アレルギーに負けない体づくりができればいいというふうに考えが変わり、育

神村さんは、「アレルギーっ子に限らず現代人の食生活は、食材に含まれる添加物や農薬の問題などからも見直されるべき。家族皆の健康のために食材、原料は確認し、購入してほしい。また、離乳食はあまり早いうちから赤ちゃんに与えると、腸の機能がまだ未熟なため、アレルギーを発症させる原因をつくってしまうこともある。特に果汁は腸のバランスを崩しやすいからと、離乳食を与えるタイミングにも注意したい」と呼びかける。



今回は、アレルギー疾患を持つ子の親がお互いの情報を交換しながら、悩みを打ち明け支え合える「沖縄アレルギーを考えるシーサーの会」を紹介する。

持っ子の親が中心となって設立された。現在3代目の会長を務める神村さんも、卵、牛乳、小麦、大豆にアレルギーを持つ息子がいる。

ほかに、重いアレルギー症状を持つ50代の女性から、「地域にアレルギーの専門医がいなくて、身近にもアレルギーのつらさを分かってくれる人がいない。情報もなく孤独で不安な日々を過ごしていた中、会を知って明るく未来を見つめて進めるような気がした。シーサーの会を絶対に無くさないでください」と便りが寄せられた。